

第2節

高校生の学習観・成績観・社会観

1. 成績観

① 成績の自己評価

成績の自己評価は、第1回から第4回にかけて「下位」の比率が高まっている。また教科別では「数学」「英語」に関して、半数近くが「下位」と自己評価している。

- Q | ●現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。
●次の教科(数学、国語、英語)の現在の成績は、学年の中でどのくらいですか。

本調査では、高校生の成績観を(1)学年の中での総合的な成績の自己評価、(2)どのくらいの成績がとれたらよいか、(3)現在の成績は別として、うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか、という3つの側面からとらえている。

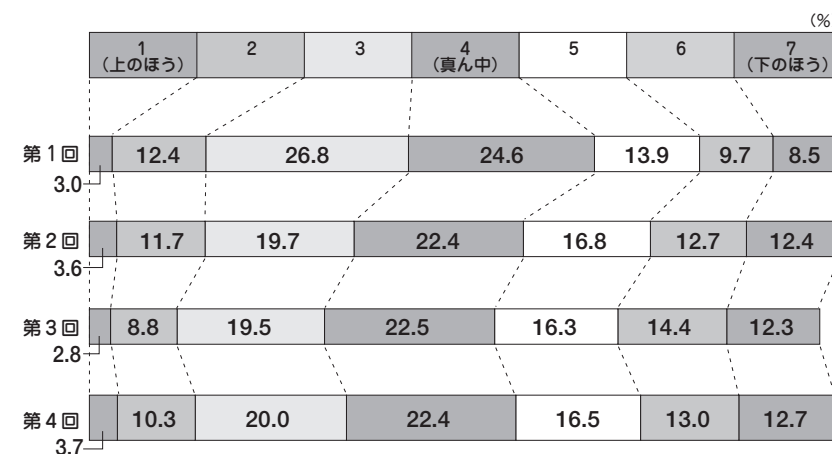
まず、学年の中での総合的な成績の自己評価を時系列でみていく(図2-2-1)。選択肢は「1(上のほう)」から「4(真ん中)」を経て「7(下のほう)」まで7段階に分けて、いずれかの段階を自己評価にもとづき選択させた。全体を「上位」(「1(上のほう)」「2」「3」、以下同)、「中位」(「4(真ん中)」)、「下位」(「5」「6」「7(下のほう)」、以下同)に三分位し、その比率の変化をみると、第1回での「上位」が42.2%であったのに対して、第4回では34.0%と8.2ポイント減少している。同様に「下位」についてみると、第1回

の32.1%に対し、第4回では42.2%と10.1ポイント増加している。あくまでも高校生の自己評価ではあるものの、第1回に比べ自分の成績を相対的に「下位」に位置づける高校生が増加していることがわかる。

図2-2-2は性別による違いを示している。「下位」では、男子で45.7%、女子で38.8%であり、男子のほうが自分の成績を「下位」に位置づけている比率がやや高い。

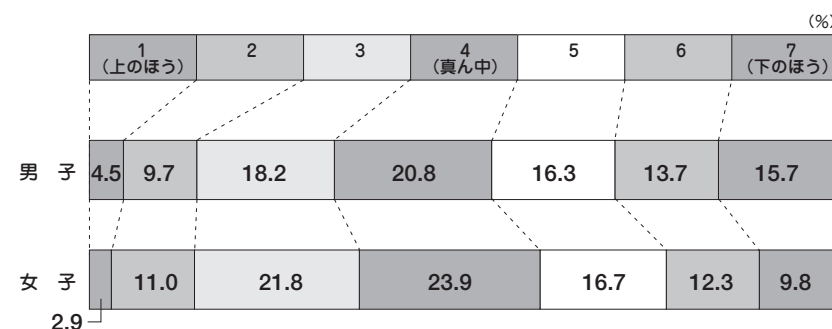
教科ごとに成績の自己評価の結果をみてみよう(図2-2-3)。「国語」では「中位」26.8%がもっとも多く、他の「数学」「英語」に比べ高い比率を示している。一方「下位」に注目すると、「国語」が39.1%、「数学」が46.7%、「英語」が46.5%であり、「数学」「英語」に関しては半数近くが自分の成績を「下位」に位置づけていることがわかる。

図2-2-1 成績の自己評価(時系列)



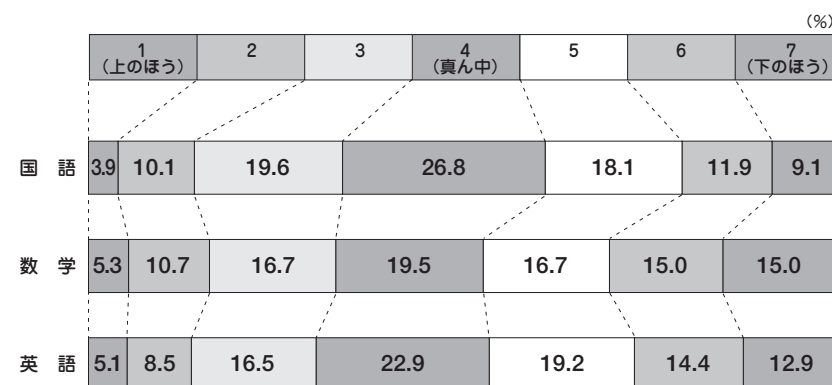
注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は第1回2,005名、第2回2,615名、第3回3,808名、第4回4,464名。

図2-2-2 成績の自己評価(性別)



注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は男子2,168名、女子2,269名。

図2-2-3 成績の自己評価(教科別)



注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は4,464名。

② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたいと思う成績は、「上位」にほぼ9割が集中する一方、真ん中から下の成績でよいと答えた高校生は約1割にとどまり、「よい成績をとりたい」という意欲は高いといえる。またがんばればとれると思う成績では、8割以上の高校生が「上位」をとれると考えている。

Q ●あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。
●現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

高校生はどのくらいの成績がとれたらいいと考えているのか、また「うんとがんばれば」どのくらいの成績がとれると考えているのだろうか。p.70~71は現在の成績に対する自己評価であったが、ここでは「どのくらいの成績がとれたらよいか（以下、とりたいと思う成績）」と「現在の成績は別として、うんとがんばればとれると思う成績（以下、がんばればとれると思う成績）」についてみてみよう。

とりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績の時系列での変化を、表2-2-1に示した。まずとりたいと思う成績は、第1回から第4回まで「上位」（「1（上のほう）」「2」「3」、以下同）にほぼ9割が集中しているが、その比率はわずかながら減少傾向がみられる。また「4（真ん中）」から下の成績でよいと答えた高校生は第1回から第4回通じてほぼ1割程度と一定の比率で推移している。またがんばればとれると思う成績は、第1回から第4回を通じて、8割以上の高校生が「上位」をとれると考えていることがわかる。このことからとりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績は、全体としては大きな変化がみられない。

さらに第4回について、現在の成績の自己評価と、とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績の分布状況を図2-2-4に示

した。これによると、とりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績ともに、「上位」と回答する高校生が多く、全体としてほとんどの高校生が「上位」を望み、またその能力があると考えている様子が見えてくる。

では現在の成績の自己評価と、とりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績にはどのような関係がみられるのだろうか。

表2-2-2に現在の成績の自己評価ととりたいと思う成績のクロス集計を示し、成績の自己評価のそれぞれでの最頻値に○をつけた。さらに成績の自己評価ととりたいと思う成績が同じ区分のところにアミをかけている。つまりアミをかけた部分より上にあれば、現在より上の成績を希望していることになる。成績の自己評価が「1（上のほう）」「2」では、「1」を8割以上が希望している。また「4（真ん中）」「5」ではとりたいと思う成績は現在の自己評価よりも2段階上、「6」「7（下のほう）」では3段階上とする比率が高い。結果として「下位」（「5」「6」「7（下のほう）」）と自己評価している高校生の半数近くは、「3」「4」を希望している。

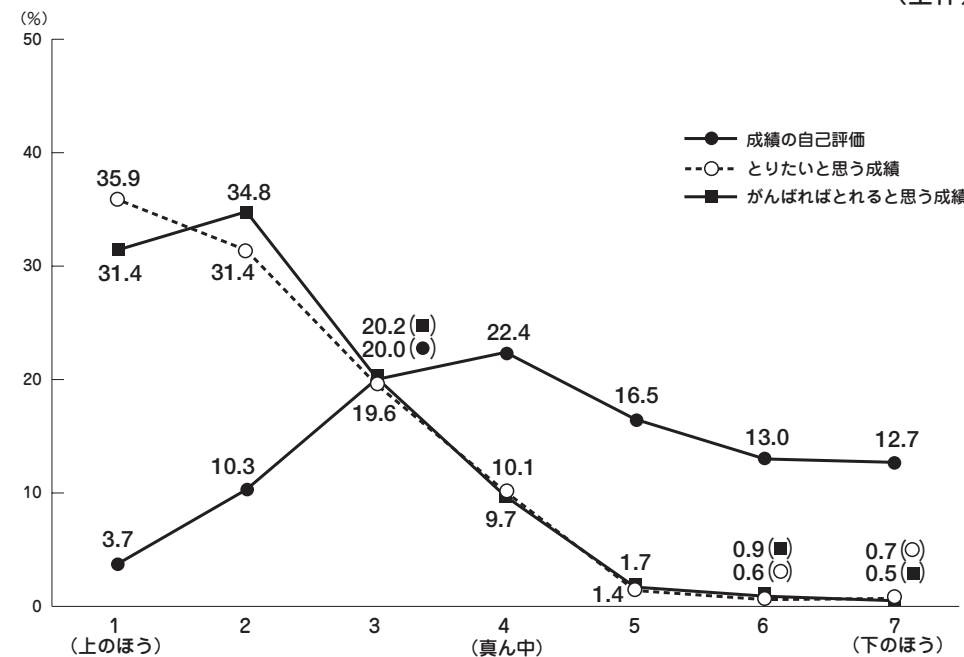
同様に表2-2-3で現在の成績の自己評価とがんばればとれると思う成績のクロス集計を示した。表2-2-2で確認した傾向とほぼ同じである。

表2-2-1 とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績（時系列）

		(%)			
		第1回 (2,005)	第2回 (2,615)	第3回 (3,808)	第4回 (4,464)
とりたいと思う成績	1（上のほう）	43.7	43.1	38.6	35.9
	2	31.6	28.8	28.7	31.4
	3	15.3	16.3	19.6	19.6
	4（真ん中）	6.6	9.9	9.3	10.1
	5	0.8	0.7	0.7	1.4
	6	0.3	0.3	0.4	0.6
	7（下のほう）	0.5	0.4	0.6	0.7
がんばればとれると思う成績	1（上のほう）	29.8	30.8	28.3	31.4
	2	39.5	> 34.5	35.3	34.8
	3	19.8	20.6	21.2	20.2
	4（真ん中）	7.5	10.3	10.0	9.7
	5	1.4	2.1	1.5	1.7
	6	0.6	0.6	0.6	0.9
	7（下のほう）	0.4	0.4	0.6	0.5

注1) 無回答・不明は省略した。
注2) <>は5ポイント以上差があるもの。
注3) ()内はサンプル数。

図2-2-4 成績の自己評価・とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績（全体）



注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は4,464名。

表2-2-2 とりたいと思う成績(成績の自己評価別)

		成績の自己評価						
		1 (上のほう)	2	3	4 (真ん中)	5	6	7 (下のほう)
とりたいと思う成績	1(上のほう)	84.9	80.0	46.4	27.1	20.4	19.1	23.4
	2	7.2	17.4	50.1	45.3	30.1	19.6	10.8
	3	1.8	1.5	2.5	21.3	38.1	35.7	21.4
	4(真ん中)	1.8	0.9	0.8	4.8	10.3	22.7	31.0
	5	0.0	0.0	0.0	0.9	0.7	2.1	6.2
	6	0.6	0.0	0.1	0.1	0.3	0.3	3.5
	7(下のほう)	3.6	0.2	0.1	0.3	0.1	0.0	3.4

注1) 無回答・不明は省略した。
 注2) ○は、成績の自己評価別での最頻値を示す。成績の自己評価ととりたいと思う成績が同じ区分にアミをかけている。
 注3) サンプル数は4,464名。

表2-2-3 がんばればとれると思う成績(成績の自己評価別)

		成績の自己評価						
		1 (上のほう)	2	3	4 (真ん中)	5	6	7 (下のほう)
がんばればとれると思う成績	1(上のほう)	92.2	81.3	40.2	20.6	15.1	14.3	18.2
	2	0.0	16.7	56.4	48.2	36.0	22.2	13.5
	3	1.2	0.9	2.6	26.1	36.4	33.8	23.5
	4(真ん中)	0.6	0.2	0.4	3.5	11.0	26.3	26.2
	5	1.2	0.0	0.0	0.2	0.4	2.7	9.6
	6	0.6	0.0	0.0	0.4	0.3	0.0	5.5
	7(下のほう)	3.0	0.0	0.1	0.2	0.1	0.0	2.5

注1) 無回答・不明は省略した。
 注2) ○は、成績の自己評価別での最頻値を示す。成績の自己評価とがんばればとれると思う成績が同じ区分にアミをかけている。
 注3) サンプル数は4,464名。

③ 成績観・学力観

時系列でみると「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい(名門大学志向)」が第1回から一貫して高く、第4回ではほぼ6割を占める。一方で第2回では56.2%で突出していた「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(ふつうの生活志向)」は、第3回でいったん10ポイント程度減少したものの、今回は48.6%にまで増加している。これは偏差値45未満の学校群での比率が高いことが影響している。

Q | あなたは、次のように思うことがありますか。

高校生の大半は、とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績ともに中位以上の成績をとりたいと考えていることはp.72~74で述べた。

では高校生が成績や学力についてどのように考えているのだろうか。時系列での変化を図2-2-5に示した。「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい(以下、名門大学志向)」が第1回から一貫して高く、第4回ではほぼ6割を占める。他方、第2回で「名門大学志向」を上回っていた「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(以下、ふつうの生活志向)」は56.2%、第3回でいったん10ポイント程度減少したものの、今回では48.6%にまで増加している。「名門大学志向」「ふつうの生活志向」はともに第1回から第4回にかけて、ほぼ半数が回答している項目である。

その他の4項目について同様にみていくと、「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい(以下、ともかく合格志向)」は、第1回から3割前後である。「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない(以下、学校生活エンジョイ志向)」と「今は勉強することが一番大切なことだ(以下、勉強本位志向)」は、ともに第1回から2割程度を占めている。また「そんなに勉強しなくても、な

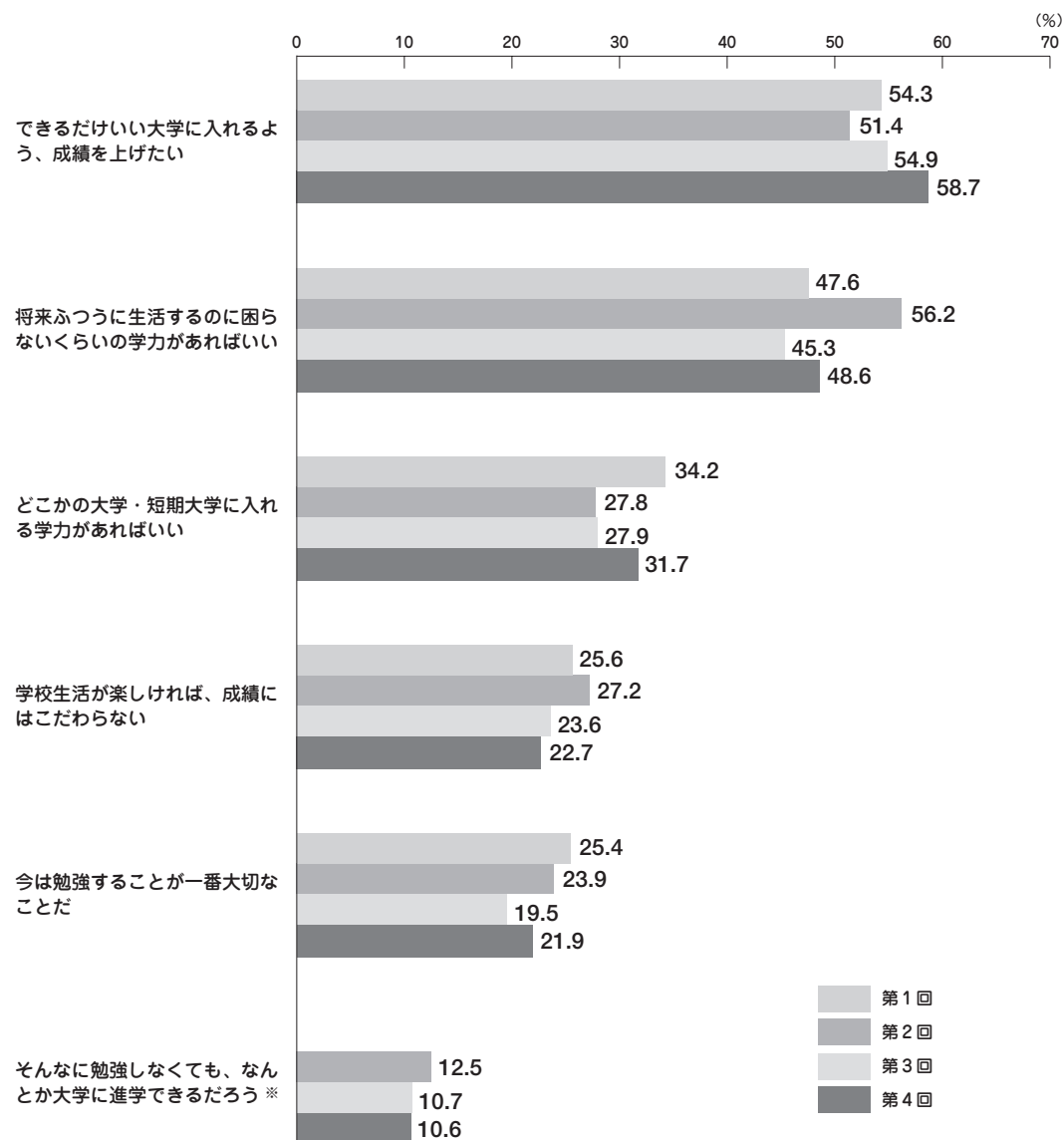
んとか大学に進学できるだろう」は第2回からの質問項目であるが、回答率は1割程度でほぼ一定といえる。

表2-2-4は学校の偏差値帯別に成績観や学力観の違いを示している。学校群の間で顕著な差異がみられたのは「名門大学志向」と「ふつうの生活志向」である。

「名門大学志向」が偏差値55以上の学校群で73.1%であるのに対して、45未満は38.4%であり、偏差値が高い学校群ほど比率が高くなっている。逆に「ふつうの生活志向」は偏差値55以上は34.0%、45未満は65.6%と偏差値が低い学校群ほど比率が高くなっている。つまり「名門大学志向」と「ふつうの生活志向」は相反する傾向を示している。

また偏差値45未満の学校群で比率が高いのが、「ともかく合格志向」41.1%、「学校生活エンジョイ志向」32.8%である。一方で偏差値55以上は「勉強本位志向」が25.8%と他の学校群と比べ高いものの、その差は5ポイント前後である。表2-2-1(p.73)で述べたがんばればとれると思う成績では、9割近い高校生がクラスの真ん中よりも上を希望しながら、勉強本位と考える高校生は4人に1人の割合であり、「いい成績はとりたい」と願うものの、勉強本位で考えようとする高校生は少ないといった矛盾がうかがえる。

図2-2-5 成績観・学力観(時系列)



注1) 複数回答。
 注2) ※は第1回に該当項目なし。第2回・第3回は「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」。
 注3) サンプル数は第1回2,005名、第2回2,615名、第3回3,808名、第4回4,464名。

表2-2-4 成績観・学力観(偏差値帯別)

	偏差値55以上 (1,593)	50以上55未満 (905)	45以上50未満 (416)	45未満 (1,550)
できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい	73.1	69.9	55.0	38.4
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	34.0	41.0	57.7	65.6
どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい	23.6	27.4	37.5	41.1
学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない	16.4	16.8	22.4	32.8
今は勉強することが一番大切なことだ	25.8	18.3	22.6	19.8
そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう	9.2	10.6	11.8	11.6

注1) 複数回答。
 注2) <>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

2. 学習していて感じること

6～7割の高校生が、社会や自然について「すばらしい」「ふしぎだな」と感じるが、それらについて自ら調べたり考えたりするのは4～5割にとどまる。男子は社会や自然のしくみ、女子は他者とのコミュニケーションへの関心が高い。

Q | あなたは勉強していて、次のように感じるがありますか。

教科の学習をしていく過程で、新たに学んだことをきっかけに教科の枠を超えたさまざまな感情や知的好奇心や関心の高まりを感じることもあるだろう。そこで、高校生が学習をしているときに、「すばらしい」「ふしぎだな」とか、調べたり考えたりするのが好きだと感じた経験があるかどうかを質問した。

はじめに図2-2-6から全体の傾向をみてみよう。「よくある」および「時々ある」と回答した比率の合計は、多い順にみると「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」74.3%、「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う」74.1%、「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」62.4%である。逆に少ないのは、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」41.7%、「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」47.4%、「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」48.2%となっている。

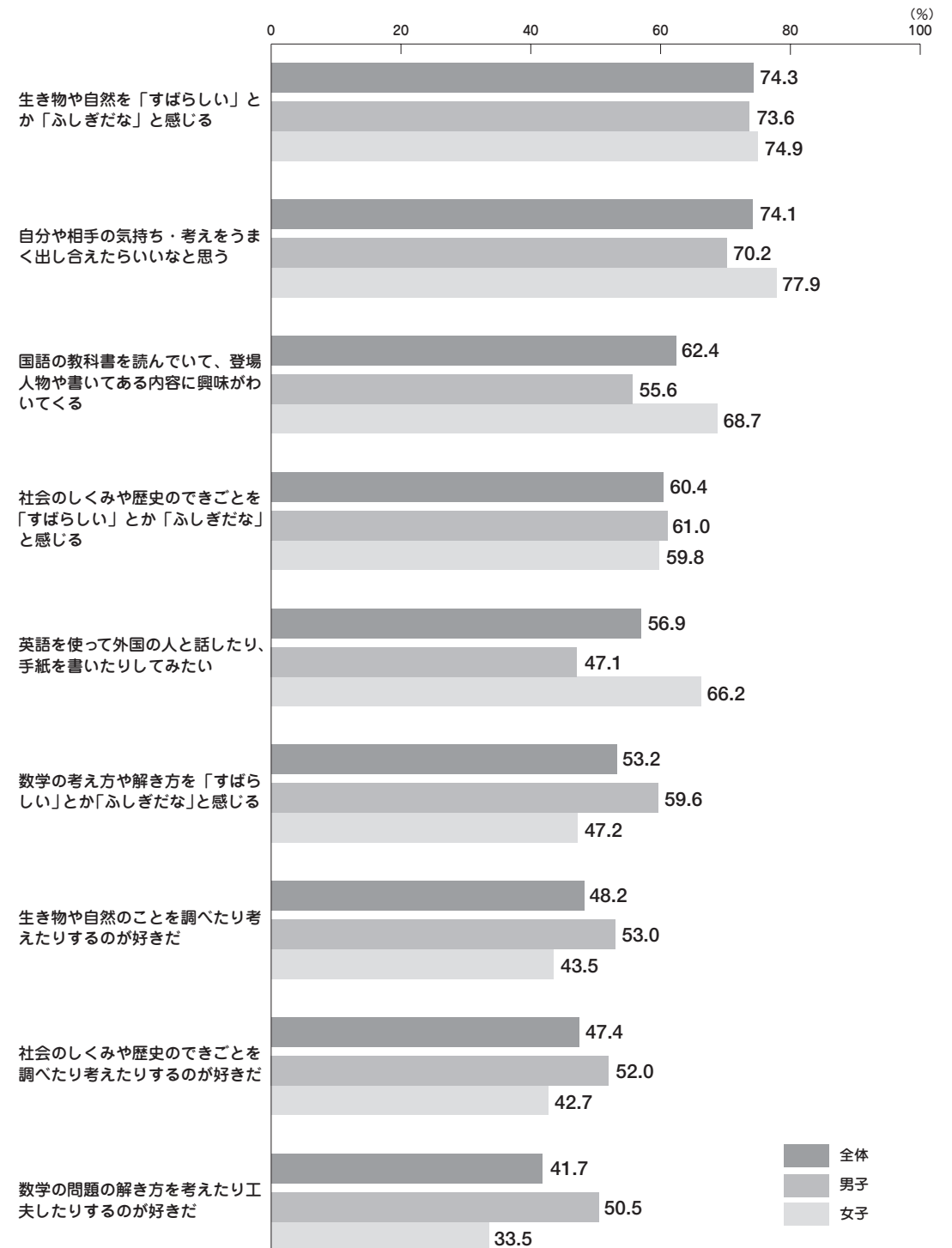
学習を通して「すばらしい」「ふしぎだな」と感じたり他者への関心をもったりすることはあるものの、それに比べると、それをきっかけに自ら調べたり考えたりと、さらなる学習行動に進むことはあまり好きではない。第3回と比較しても大きな変化を示した項目はなく、「総合的な学習の時間」をはじめとする新しい学力観に基づく教育実践は少しずつ普及しているものの、その「効果」はまだ高校生には表れていないようだ。

大学入試などに向けた文理別の進路には性

差がみられる(p.28～29参照)。そこで図2-2-6から性別での結果をみてみよう。男子は「数学の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」と感じる比率が高い。一方、女子は「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う」「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」が高い。学習の際に感じることの性差は、文理の差というより、男子は社会や自然のしくみ、女子は他者とのコミュニケーションに関心を持ちやすいことによる差と考えられる。

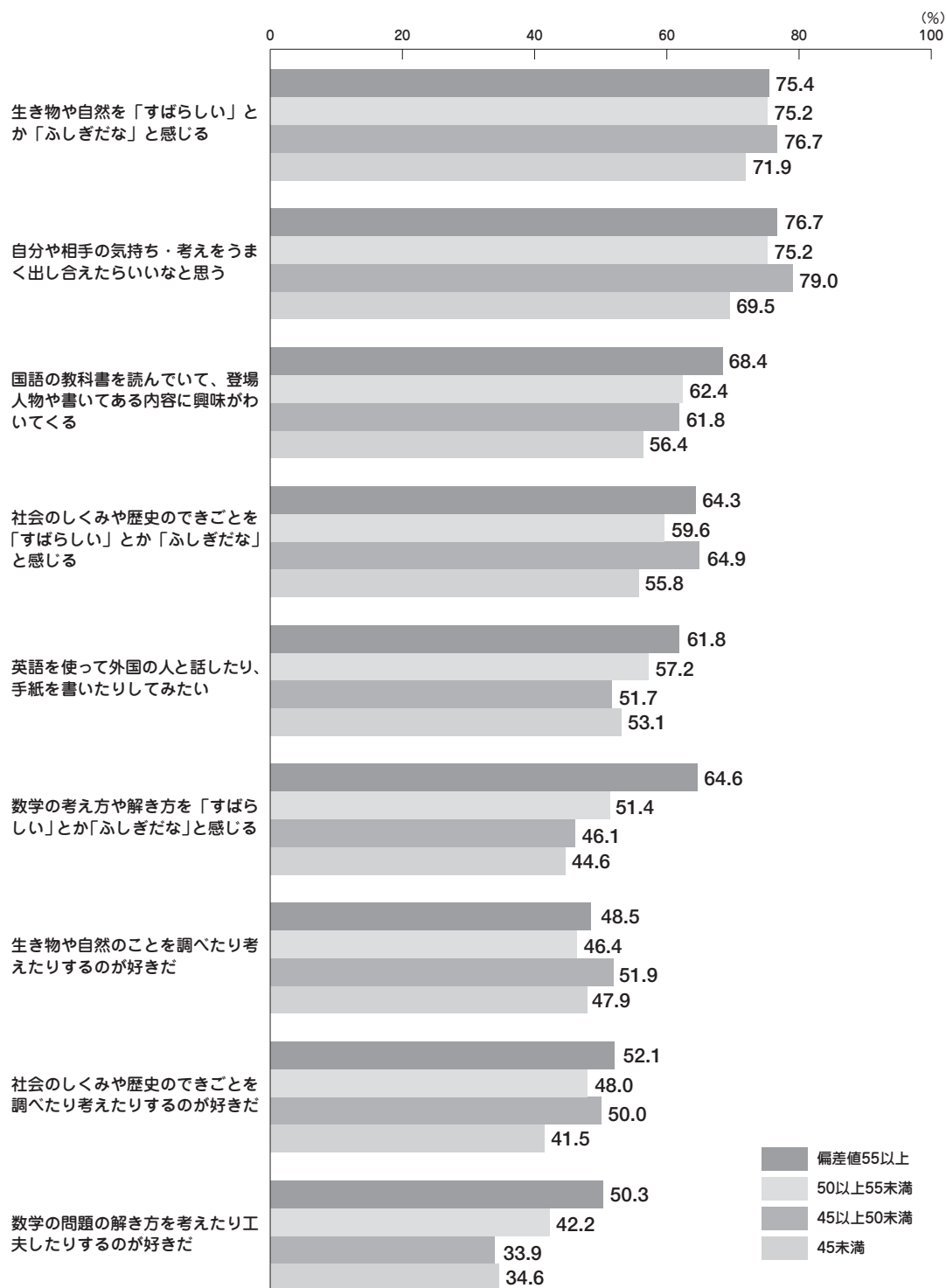
最後に、学校の偏差値帯別の結果を図2-2-7からみてみよう。偏差値55以上の学校群から45未満の学校群にかけて差がみられたのは、「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」「数学の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」で、理科や地歴・公民に関する項目では差がみられなかった。成績面で重視される、または点差のつく教科か否かが、学習の際に感じることにまで影響しているようだ。

図2-2-6 学習していて感じること(全体・性別)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
注2) サンプル数は全体4,464名、男子2,168名、女子2,269名。

図2-2-7 学習していて感じる事(偏差値帯別)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
 注2) サンプル数は偏差値55以上1,593名、50以上55未満905名、45以上50未満416名、45未満1,550名。

3. 学習上の悩み

学習上の悩みのトップ・ツーは、「上手な勉強の仕方がわからない」66.7%、「どうしても好きになれない科目がある」64.9%で、いずれも第1回から数ポイントほど漸増している。

Q | あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

高校卒業後の進路選択に学業成績が一定の比重をもつ以上、高校生のさまざまな悩みのなかでも学習上の悩みはきっと大きいものだろう。では、高校生は学習の過程でどのような悩みを抱えているのだろうか。15項目からそう思うものを選ぶ複数回答形式でたずねた。

はじめに図2-2-8から全体の傾向をみてみよう。半数以上が悩みにあげている項目は7項目で、多い順に「上手な勉強の仕方がわからない」66.7%、「どうしても好きになれない科目がある」64.9%、「こつこつと努力できないで困る」61.8%、「覚えなければいけないことが多すぎる」58.4%、「どうしてもこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」54.5%、「わかりやすい授業にしてほしい」51.2%、「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」50.6%である。逆に2割以下と少ないのは、「親の期待が大きすぎる」13.4%、「よい参考書や問題集が見つからない」13.6%、「先生は成績にこだわりすぎる」16.2%の3項目である。勉強しなければいけないことはわかっているが、なかなかうまくいかないもどかしさや、学んだことが将来にどうつながるのかという不安感が学習上の大きな悩みになっていると推測される。

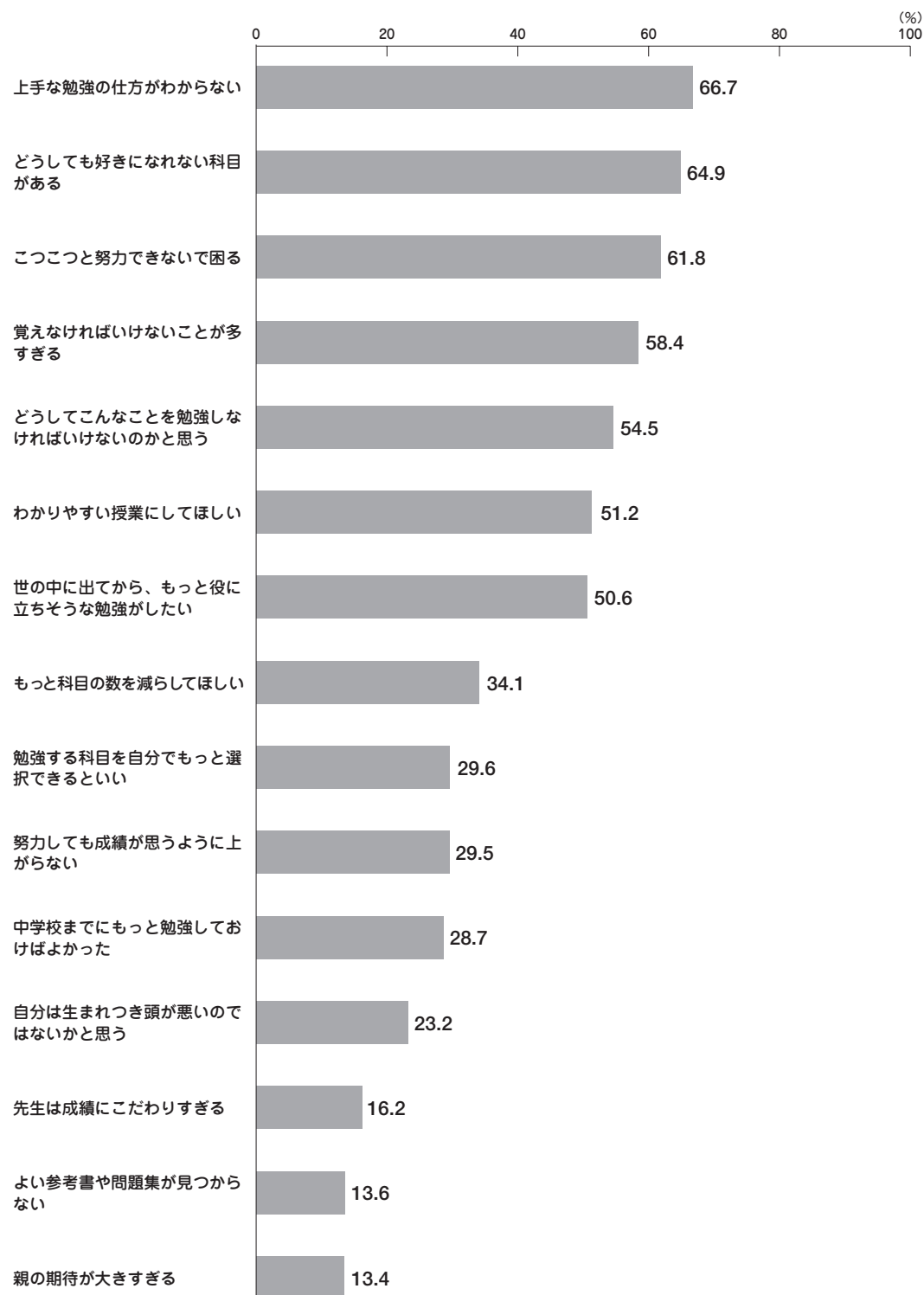
少子化の進展や学習指導要領の改訂などで高校生活のありようが変わってきているが、学習上の悩みにも変化がみられるかどうかを図2-2-9と図2-2-10から時系列的にみてみよう。漸増傾向にある項目は、「上手な勉強の仕方がわからない」「どうしても好きになれない科目がある」「わかりやすい授業

にしてほしい」「努力しても成績が思うようにならない」の4項目である。とくに前2項目は悩みのトップ・ツーでもあり、学習上の最大の悩みは増す一方だ。逆に漸減傾向にある項目は、「勉強する科目を自分でもっと選択できる」といい「先生は成績にこだわりすぎる」「親の期待が大きすぎる」の3項目である。必修科目の単位数が減ってきたことや少子化の影響で受験競争の厳しさが全体として緩んできたことが影響していると考えられる。

卒業後の進路が多様な高校生は、学校の偏差値帯によって学習上の悩みにも違いがある可能性がある。図2-2-11から学校の偏差値帯別の結果をみてみよう。偏差値55以上の学校群と45未満の学校群で10ポイント以上差がある項目は、「どうしても好きになれない科目がある」「わかりやすい授業にしてほしい」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」「もっと科目の数を減らしてほしい」「中学校までにもっと勉強しておけばよかった」である。とくに「中学校までにもっと勉強しておけばよかった」は20ポイントほどの差がみられ、45未満の学校群の高校生は高校入試の結果に後悔しているという可能性が考えられる。

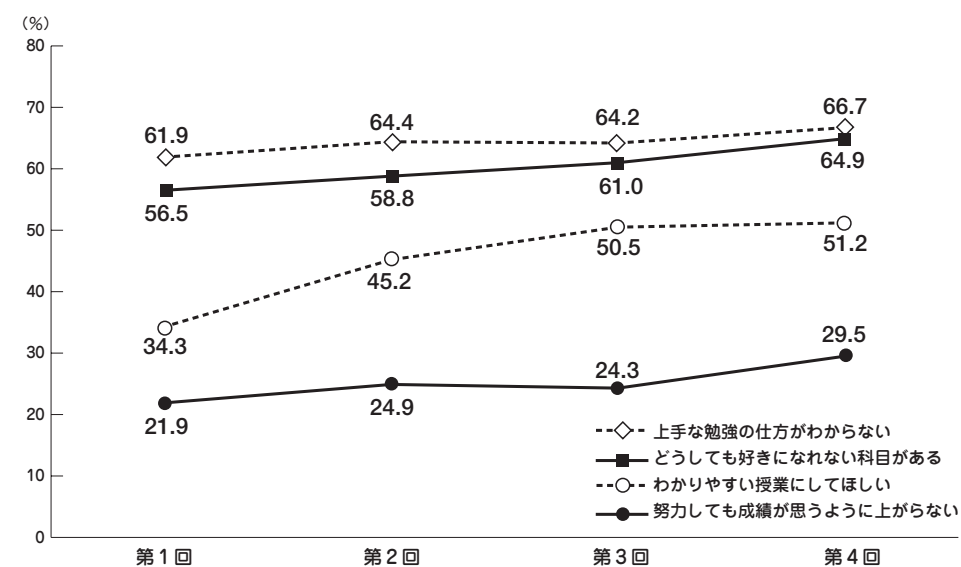
また、目立った差ではないが、偏差値55以上の学校群の高校生ほど「親の期待が大きすぎる」と思っているのに、「先生は成績にこだわりすぎる」は45未満の学校群の高校生ほどそう思っていて、親や教師のまなごしの受け止め方が学校群で異なることがわかる。

図2-2-8 学習上の悩み(全体)



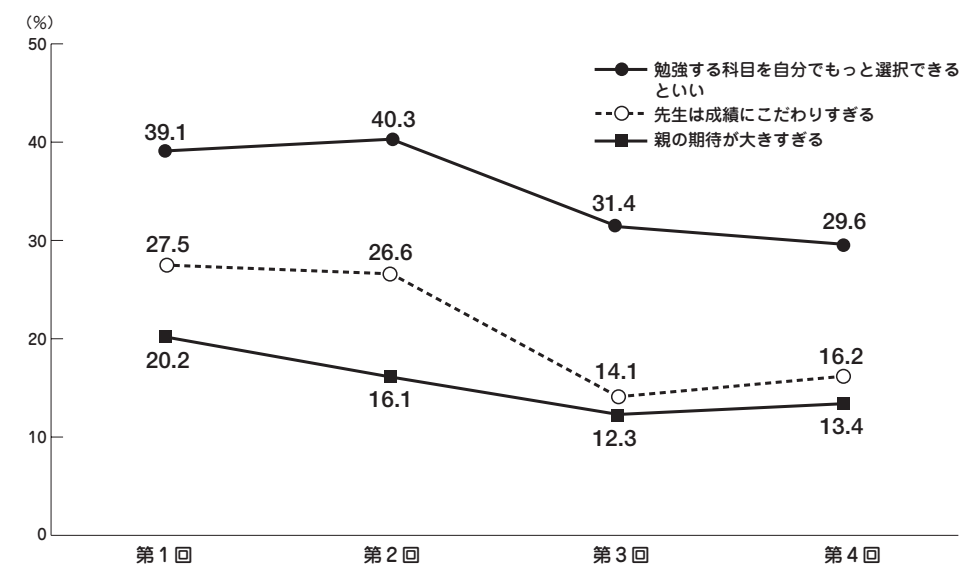
注1) 複数回答。
注2) サンプル数は4,464名。

図2-2-9 学習上の悩み・漸増傾向項目(時系列)



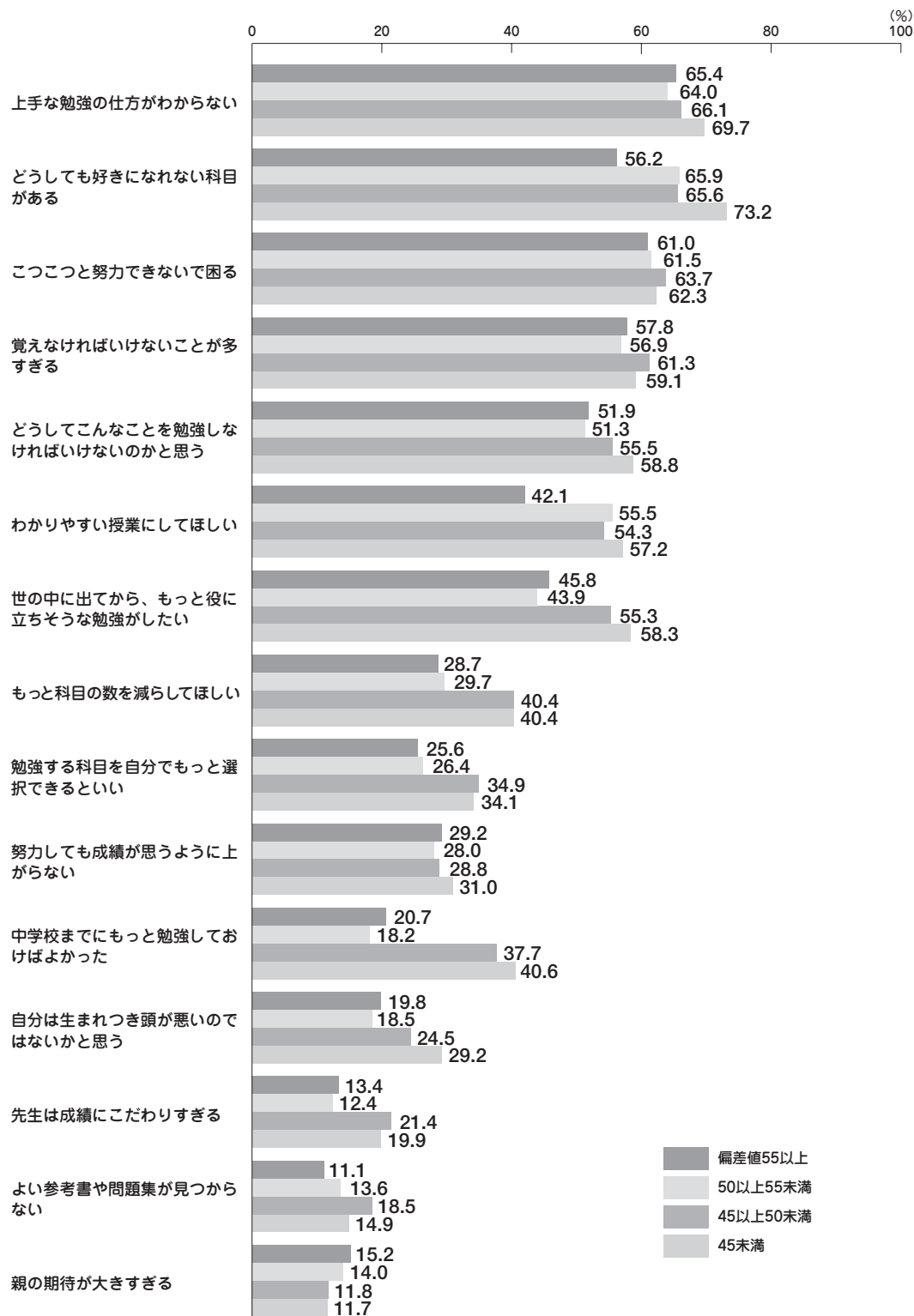
注1) 複数回答。
注2) サンプル数は第1回2,005名、第2回2,615名、第3回3,808名、第4回4,464名。

図2-2-10 学習上の悩み・漸減傾向項目(時系列)



注1) 複数回答。
注2) サンプル数は第1回2,005名、第2回2,615名、第3回3,808名、第4回4,464名。

図2-2-11 学習上の悩み(偏差値帯別)



注1) 複数回答。
注2) サンプル数は偏差値55以上1,593名、50以上55未満905名、45以上50未満416名、45未満1,550名。

4. 進路・進学意識

① 受験と希望する進学段階

高校生は7割強が「四年制大学まで」「大学院まで」の進学を希望している。具体的には、「四年制大学まで」66.0%、「大学院まで」10.6%、「専門学校・各種学校まで」13.1%、「高校まで」4.0%、「短期大学まで」3.9%と続く。時系列的にみると、(1) 四年制大学の微減、(2) はじめて1割に達した大学院進学希望者、(3) 専門学校・各種学校の着実な増加、(4) 短期大学の伸び悩みがみられる。

Q | あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

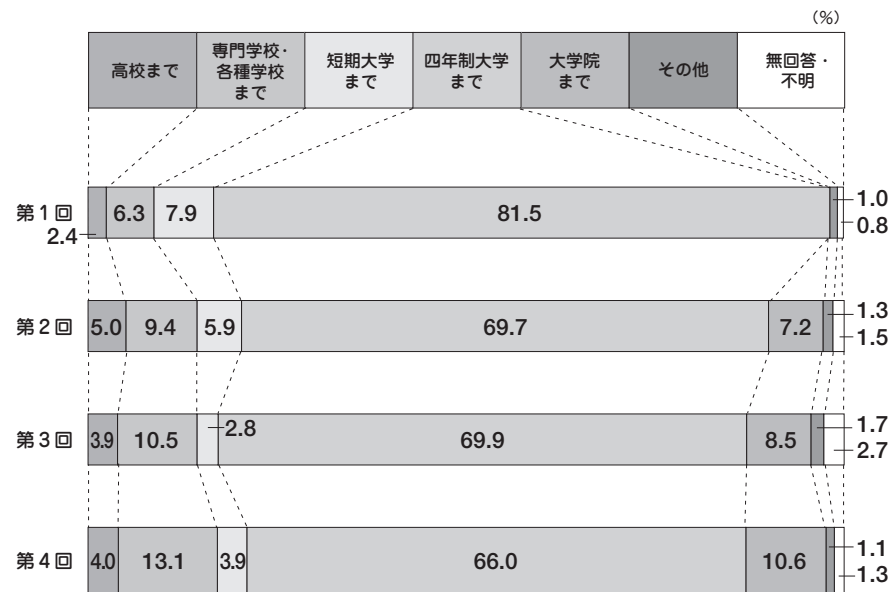
高校生の進学意識について、(1) 希望する進学段階、(2) 希望する大学のタイプ、(3) 希望する入試の方法からみていく。

まず、高校生はどの学校段階まで進学する希望を持っているのだろうか(図2-2-12)。第4回調査の対象とした高校生(普通科)は7割強(76.6%)が「四年制大学まで」「大学院まで」の進学を希望している。内訳は、「四年制大学まで」66.0%、「大学院まで」10.6%である。これに「専門学校・各種学校まで」13.1%、「高校まで」4.0%、「短期大学まで」3.9%と続く。時系列的に比較すると、(1) 「四年制大学まで」の微減(第1回81.5%→第2回69.7%→第3回69.9%→第4回66.0%、以下同)、(2) 「大学院まで」がはじめて1割を超え(なし→7.2%→8.5%→10.6%)、(3) 「専門学校・各種学校まで」の着実な増加(6.3

%→9.4%→10.5%→13.1%)、それに代わって、(4) 「短期大学まで」の伸び悩み(7.9%→5.9%→2.8%→3.9%)がみられる。第1回から今回までの16年間で増加傾向にある専門・各種学校進学希望者の割合は、高校生の実学志向が年々強まっていることを示している。

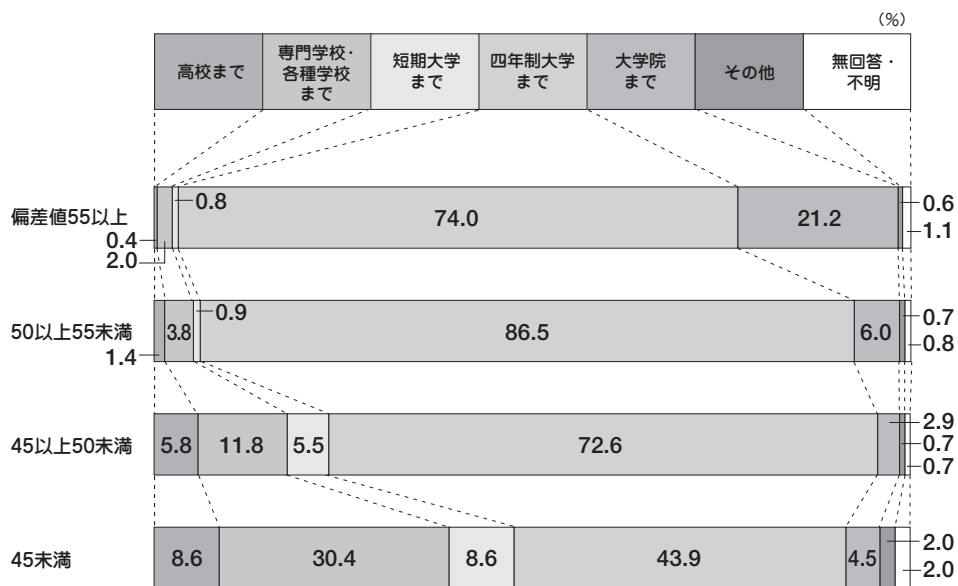
学校の偏差値帯別にみると(図2-2-13)、偏差値が高い学校群ほど、(1) 四年制大学、大学院への進学希望率が高く(ことに大学院)、(2) 短期大学および専門・各種学校進学希望率が低く、(3) 「高校まで」とする者が少ない傾向がある。偏差値45未満の普通科高校では、四年制大学以上への進学希望は5割に満たず(48.4%)、4割近くが短期大学または専門・各種学校進学希望、1割近くが「高校まで」を希望している。

図2-2-12 希望する進学段階(時系列)



注1) 第1回には「大学院まで」の該当項目なし。
 注2) サンプル数は第1回2,005名、第2回2,615名、第3回3,808名、第4回4,464名。

図2-2-13 希望する進学段階(偏差値帯別)



注) サンプル数は偏差値55以上1,593名、50以上55未満905名、45以上50未満416名、45未満1,550名。

② 希望する大学のタイプ

希望する大学は「それ以外の(難関ではない)国公立大学」46.4%がもっとも多く、これに「難関の国公立大学」の30.4%、「それ以外の(難関ではない)私立大学」11.6%、「難関の私立大学」6.9%が続く。全体的に国公立大学進学希望が優勢で、その傾向は、偏差値55以上の学校群と45以上50未満の学校群で強い。45未満の学校群では逆に、国公立大学進学希望が減少し、私立大学進学希望者が増加に転じている(第3回25.4%→第4回36.6%)。

Q 「四年制大学まで」あるいは「大学院まで」と答えた方にうかがいます。
 あなたは、どんな大学へ進みたいと思っていますか。

四年制大学あるいは大学院まで進学を希望する高校生に、どんな大学へ進みたいと思っているのかをたずねた。選択肢は、「難関の国公立大学」「それ以外の国公立大学」「難関の私立大学」「それ以外の私立大学」「その他」である。結果は図2-2-14に示す。もっとも多かったのは、「それ以外の国公立大学」46.4%であり、これに「難関の国公立大学」の30.4%、「それ以外の私立大学」11.6%、「難関の私立大学」6.9%が続く。

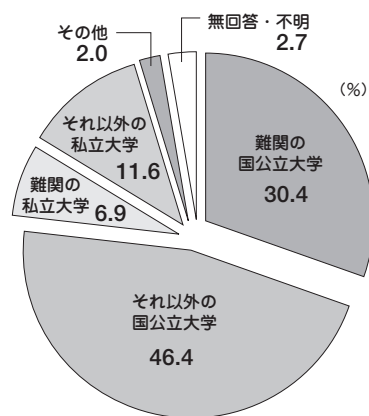
第3回と比較すると(図2-2-15)、「難関の国公立大学」が3.8ポイント増加し、「それ以外の国公立大学」が微減(約3ポイント)している。

学校の偏差値帯別にみると(図2-2-15)、偏差値55以上の学校群で「難関の国公立大学」への進学を希望する者が多く、「難関の私立大学」を希望する者が多いのは、50以上55未

満の学校群である。偏差値55以上の学校群では、第3回で「難関の国公立大学」進学希望が41.2%だったのに対して、第4回では51.1%と増加している点が特徴的である。これは、難関国公立大学が高校生にとって手に届く存在となったためという可能性が考えられる。

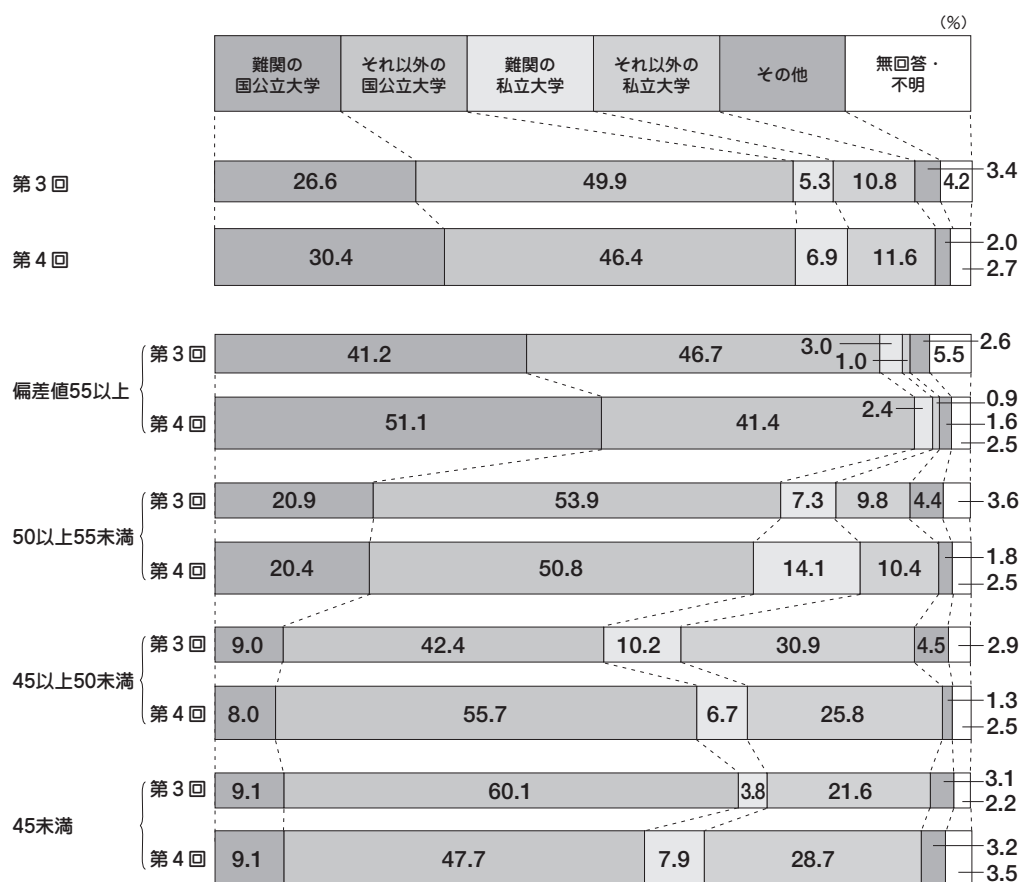
全体に、国公立大学進学希望が優勢で、第3回と比較すると、国公立大学進学希望(「難関の国公立大学」+「それ以外の国公立大学」の%)、以下同)が偏差値55以上の学校群(第3回87.9%→第4回92.5%、以下同)と45以上50未満の学校群(51.4%→63.7%)で増加している。50以上55未満の学校群では微減となっている(74.8%→71.2%)。45未満の学校群では、国公立大学進学希望が減少(69.2%→56.8%)し、かわって私立大学進学希望(「難関の私立大学」+「それ以外の私立大学」の%)が増加に転じている(25.4%→36.6%)。

図2-2-14 希望する大学のタイプ(全体)



注1) 希望する進学段階が「四年制大学まで」および「大学院まで」と回答した者について設定。
注2) サンプル数は3,417名。

図2-2-15 希望する大学のタイプ(時系列・偏差値帯別)



注) サンプル数は第3回2,986名、第4回3,417名。偏差値55以上は第3回1,352名、第4回1,516名。50以上55未満は第3回742名、第4回837名。45以上50未満は第3回443名、第4回314名。45未満は第3回449名、第4回750名。母数は希望する進学段階が「四年制大学まで」「大学院まで」と回答した者。

③ 希望する入試方法

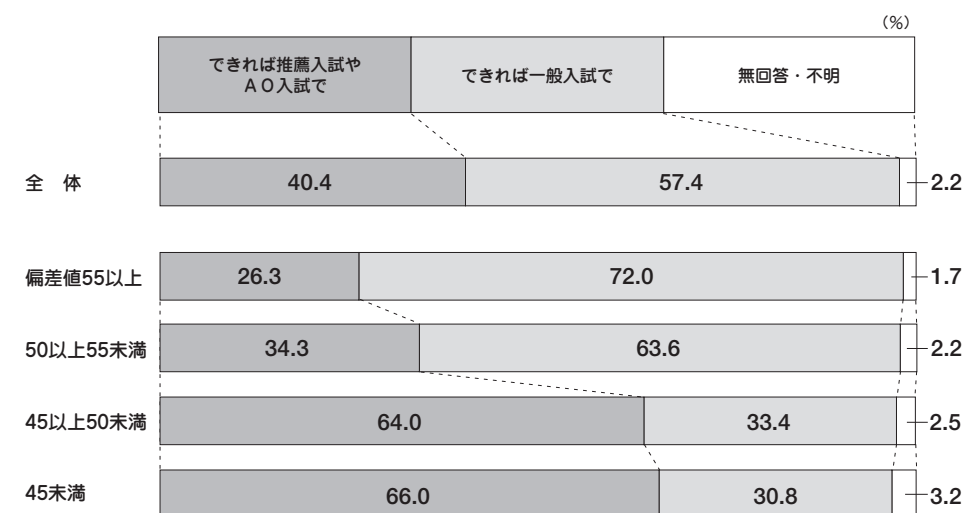
希望する入試方法は、57.4%が「できれば一般入試で」、40.4%が「できれば推薦入試やAO入試で」と回答しているが、この傾向は第3回と変わらない。偏差値が低い学校群ほど推薦入試やAO入試を希望する比率が高い(偏差値45未満66.0% > 45以上50未満64.0% > 50以上55未満34.3% > 55以上26.3%)。

Q | 大学へ進学する方法には、大きく分けて「推薦入試やAO入試」と「一般入試」の2つの方法があります。あなたは、どちらの方法で進学したいですか。

四年制大学あるいは大学院へ進学を希望する高校生について、つづけて「推薦入試やAO入試」と「一般入試」のうち、どちらの方法で進学したいかをたずねた(図2-2-16)。全体としてみると、57.4%が「できれば一般入試で」、40.4%が「できれば推薦入試やAO入試で」と回答しており、この傾向は第3回と変わらない。一般入試を希望する高校生が半数以上を占めるが、推薦入試やAO入試を希望する高校生が4割にのぼっている点は見逃せない。学校の偏差値帯別に、推薦入試や

AO入試の希望率をみると、偏差値が低い学校群ほど高く、偏差値45未満66.0%、45以上50未満64.0%、50以上55未満34.3%、55以上26.3%である。図表は省略したが、第3回と比較したとき、45以上50未満の学校群で10ポイント以上増加している(第3回53.7%→第4回64.0%)。今後このように増加していくのか、また、入試方法と大学入学後の学生の学力との間に見い出される関連について注意深く検証する必要がある。

図2-2-16 希望する入試方法(全体・偏差値帯別)



注) サンプル数は全体3,417名。偏差値55以上1,516名、50以上55未満837名、45以上50未満314名、45未満750名。母数は、希望する進学段階が「四年制大学まで」「大学院まで」と回答した3,417名。

④ 将来つきたい職業

将来つきたい職業名を具体的に書いてもらったところ、男女ともにもっとも多いのは、「学校の先生」であった（男子8.9%、女子8.2%）。つづいて、男子は「公務員」「研究者・大学教員」「医師」「薬剤師」「法律家」、女子では、「保育士・幼稚園の先生」「看護師」「薬剤師」「医師」となっている。資格や技能をもとに安定した職業を希望している。

Q | あなたが将来つきたい職業は何ですか。できるだけ具体的に記入してください。

表2-2-5は、将来つきたい職業名を具体的に書いてもらった結果について作成したランキング表である。「無記入（空欄）」「未定」「なし」その他明確な職業名に分類できないものを除外している。男子でもっとも多いのは、「学校の先生」8.9%で、これに「公務員」5.5%、「研究者・大学教員」3.7%、「医師」2.8%、「薬剤師」2.4%、「法律家（弁護士・裁判官・検察官）」2.1%、「サラリーマン」2.1%が続いている。女子でもっとも多いのは「学

校の先生」8.2%で、つづいて、「保育士・幼稚園の先生」6.2%、「看護師」5.6%、「薬剤師」3.0%、「医師」2.7%となっている。小学校、中学校段階の希望する職業と比較してみると、現実社会の職業構成を着実にふまえつつ、より安定し、かつ、学歴の有無との関連が明確な職業を思い描いていることがわかる（『第4回学習基本調査・国内調査報告書・小学生版』『同報告書・中学生版』参照）。

表2-2-5 将来つきたい職業のランキング（性別）

男子		%
1	学校の先生	8.9 (193)
2	公務員	5.5 (120)
3	研究者・大学教員	3.7 (81)
4	医師	2.8 (60)
5	薬剤師	2.4 (51)
6	法律家（弁護士・裁判官・検察官）	2.1 (46)
6	サラリーマン	2.1 (46)
8	技術者・エンジニア・整備士	1.6 (35)
9	コンピュータープログラマー・システムエンジニア	1.6 (34)
10	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士など	1.3 (29)
11	警察官	1.2 (27)
12	建築家・設計士	1.0 (22)
12	消防士（レスキュー・救急救命士）	1.0 (22)
14	スポーツトレーナー・インストラクター	0.9 (19)
14	美容師・理容師	0.9 (19)
14	車の整備士・カーデザイナー	0.9 (19)
17	語学関係・国際関係	0.8 (18)
17	公認会計士・税理士	0.8 (18)
19	保育士・幼稚園の先生	0.7 (16)
19	調理師・コック	0.7 (16)
女子		%
1	学校の先生	8.2 (187)
2	保育士・幼稚園の先生	6.2 (140)
3	看護師	5.6 (127)
4	薬剤師	3.0 (67)
5	医師	2.7 (62)
6	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士など	2.5 (57)
7	語学関係・国際関係	2.5 (56)
8	公務員	2.1 (48)
9	栄養士	2.0 (45)
9	カウンセラー・臨床心理士	2.0 (45)
11	学芸員・司書	1.7 (38)
12	美容師・理容師	1.6 (37)
13	法律家（弁護士・裁判官・検察官）	1.3 (30)
14	介護福祉士・ホームヘルパー	1.2 (28)
15	研究者・大学教員	1.2 (27)
15	フライトアテンダント	1.2 (27)
17	マンガ家・イラストレーター	1.1 (25)
17	観光業	1.1 (25)
19	サラリーマン	1.1 (24)
20	獣医師	1.0 (22)

注1) サンプル数は男子2,168名、女子2,269名。

注2) ()内は回答実数。

5. 社会観・価値観

7割以上の高校生にとって学校の勉強は、「一流の会社に入るために」「会社や役所に入ってえらくなる（出世する）ために」など、「職業的な成功、地位の達成」の手段としてとらえられている。つづいて、「社会で役に立つ人になるために」「心にゆとりがある幸せな生活を送るために」など、実用面ではない効用もそれぞれ5割以上の高校生が信じている。幸福をもたらす要因は、小学生、中学生同様に、高校生でも「いい友だち」(96.3%)であった。時間選好については、「将来優先」「現在優先」の間に全体として差異はないものの、性別や学校の偏差値帯とは関連がみられた。

- Q**
- 学校の勉強は、次のことにどのくらい役立つと思いますか。
 - あなたは、次の意見をどう思いますか。
 - あなたの考え方は、次のどちらに近いですか。

ここでは、まず学校の勉強の効用についてたずねている。「とても役に立つ」および「まあ役に立つ」と回答した比率の合計を多い順に整理すると図2-2-17ようになる。

回答率が7割を示し、大多数の高校生が勉強の効用としてあげたのは、「一流の会社に入るために」77.0%、「会社や役所に入ってえらくなる（出世する）ために」74.7%の2項目である。ここから、「職業的な成功、地位の達成」の手段として学校の勉強をとらえていること、したがって、学歴主義的な社会観を大多数の高校生が依然としてもっていることがうかがえる。しかし、「お金持ちになるために」の回答率は54.5%となっており、「職業的な成功、地位の達成」ほどの効用は期待されていない。「職業的な成功、地位の達成」と「経済的な成功」がいずれの高校生にも同一視されているわけではないと推測される。

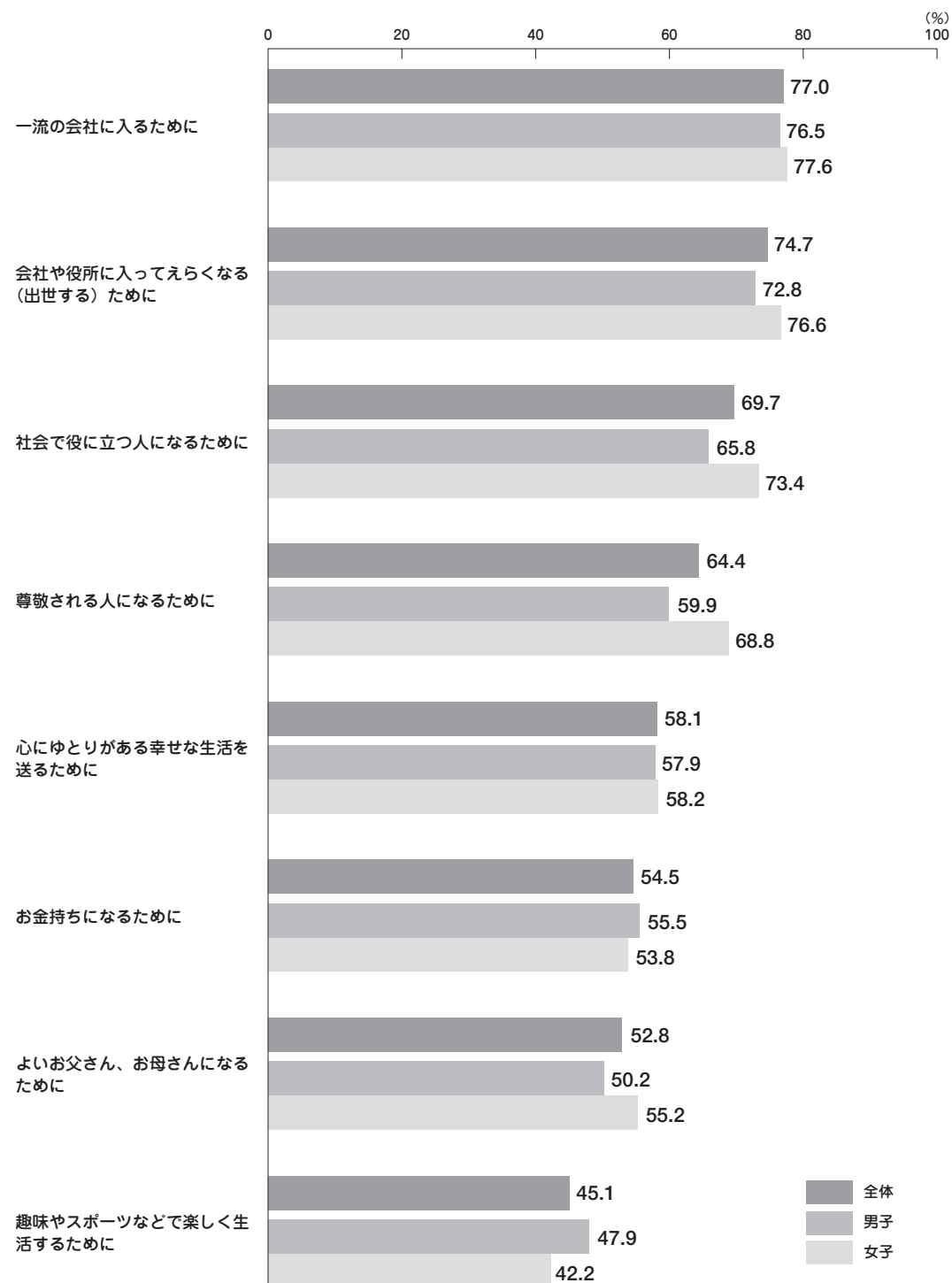
小学生^{*1}では、多くの子どもたちが勉強の

効用として支持していた「よいお父さん、お母さんになるために」「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」の回答率は5割前後となっているものの、後者の45.1%という数値からは、高校生たちがそれなりに勉強の効用を信じているといえよう。

性別でみると、「お金持ちになるために」と「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」の2項目を除いて、男子より女子の数値が高くなっており、女子のほうが勉強の効用を信じていることがわかる。とくに、「尊敬される人になるために」（女子68.8%>男子59.9%、以下同）、「社会で役に立つ人になるために」（73.4%>65.8%）の2項目で性差が明確である。女子の学習への動機づけは、勉強の道具的効用ではない側面による可能性が考えられる。

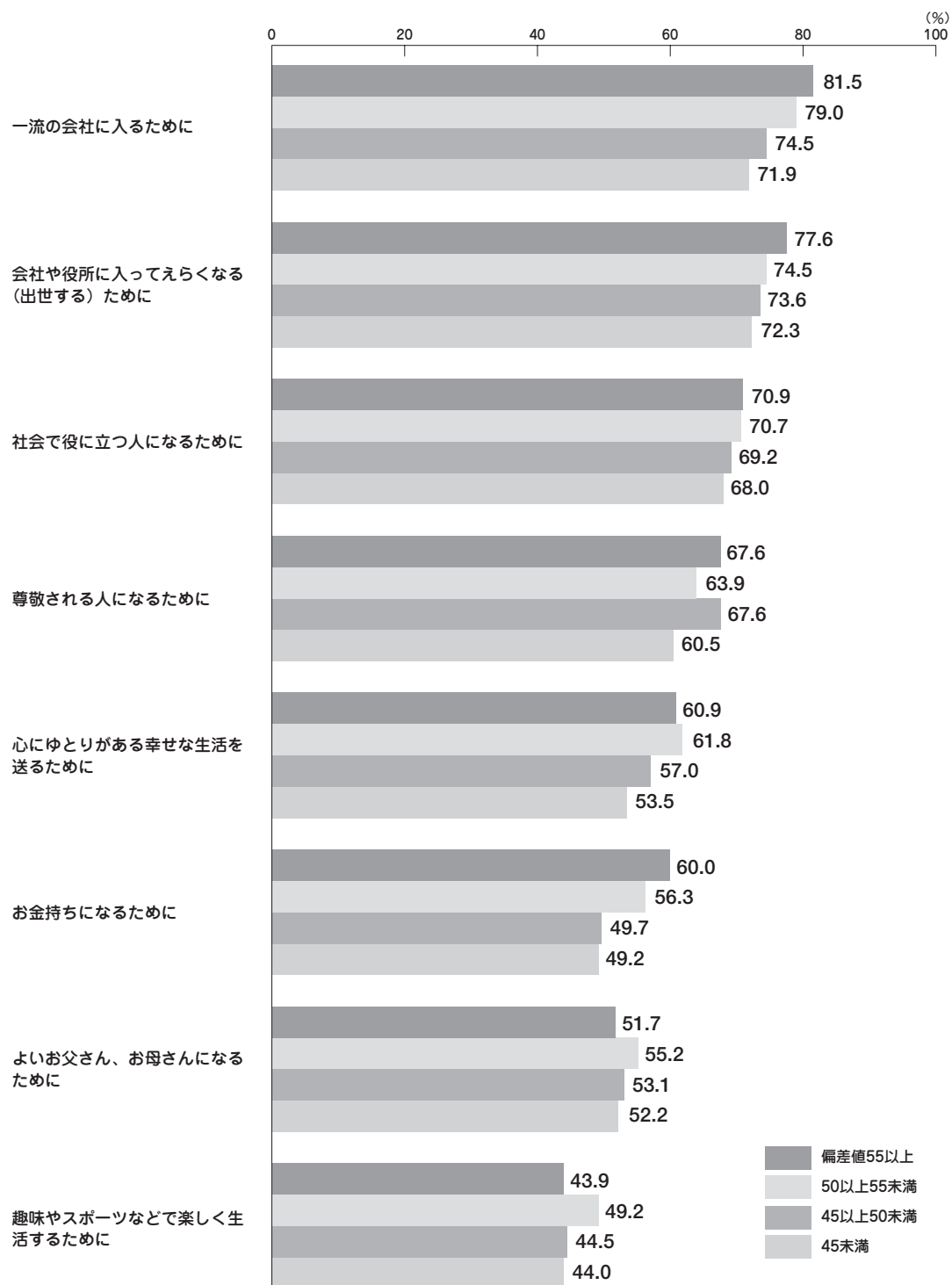
学校の偏差値帯別では、いずれの項目においても、偏差値の高い学校群ほど勉強の効用を認める回答が多い（図2-2-18）。

図2-2-17 勉強の効用（全体・性別）



注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計。
注2) サンプル数は全体4,464名、男子2,168名、女子2,296名。

図2-2-18 勉強の効用(偏差値帯別)



注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計。
 注2) サンプル数は偏差値55以上1,593名、50以上55未満905名、45以上50未満416名、45未満1,550名。

図2-2-19・20は、高校生たちのより一般的な社会観・価値観をさぐるために設定した8つの意見についてどう思うかたずねた結果を「とてもそう思う」と「まあそう思う」と回答した比率の合計で示したものである。高校生にとっても、小学生^{※1}や中学生^{※2}同様に、「いい友だちがいると幸せになれる」ことが幸福の要因としてあげられており、その回答率96.3%は、「お金がたくさんあると幸せになれる」62.7%、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」38.1%を大きく上回っている。ただし、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」は性別(男子42.4%>女子33.9%)および学校の偏差値帯別(偏差値55以上42.0%>45未満30.8%)によって明確な差異がみられる。

「日本は、競争がはげしい社会だ」と考える高校生は7割以上いるが、他方、「日本は、努力すればむくわれる社会だ」と考える高校生は半数に満たない。この2項目については、学校の偏差値帯別によって顕著な差異はみられない。学校の偏差値帯別によって差異がみられたのは「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」である(偏差値55以上62.1%>50以上55未満56.9%>45以上50未満46.9%>45未満39.3%)。

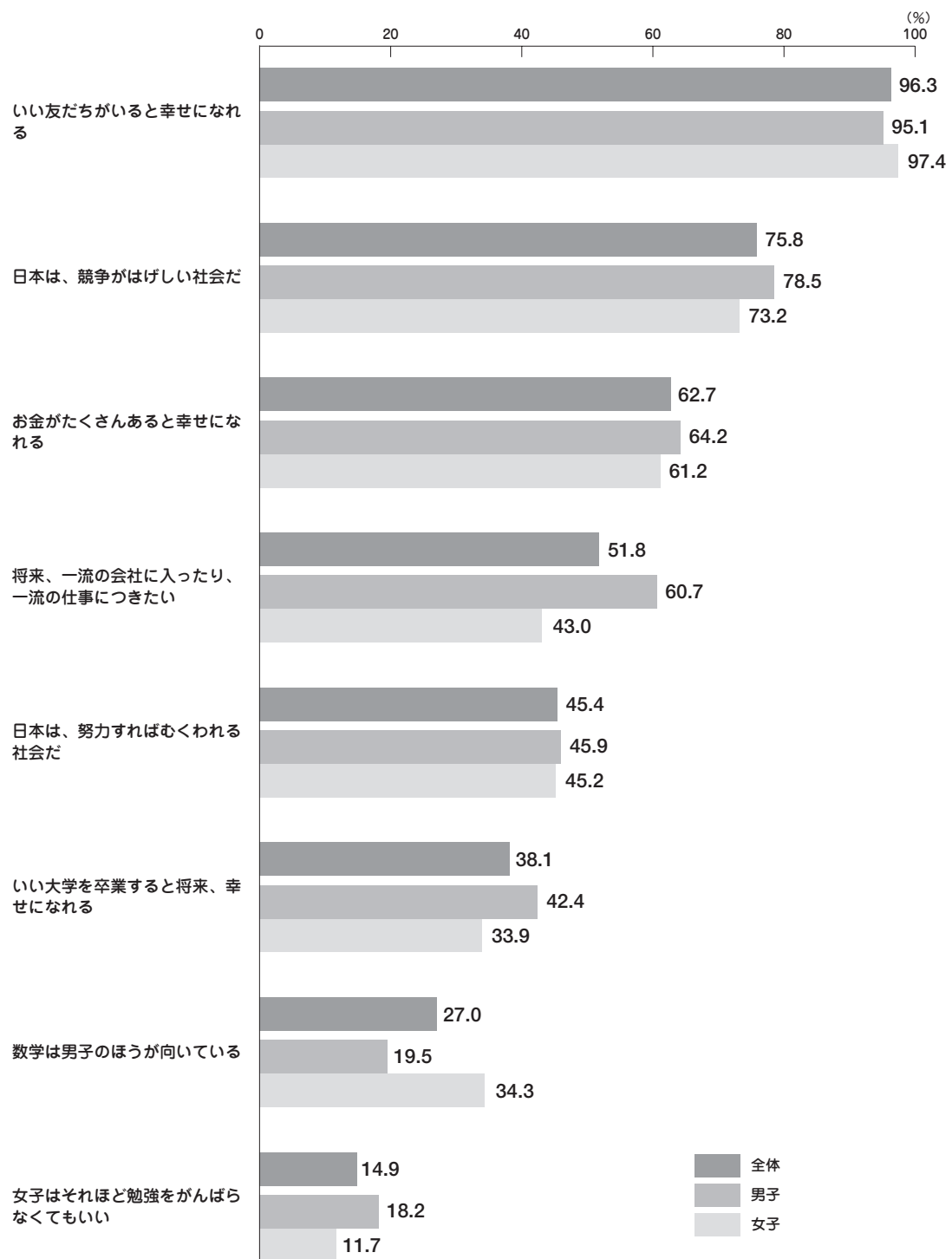
「女子はそれほど勉強をがんばらなくても

いい」14.9%、「数学は男子のほうが向いている」27.0%という回答結果からは、全体として高校生たちが伝統的なジェンダー規範にそれほどとらわれていないといえる。しかし、これを性別でみると、とくに「数学は男子のほうが向いている」という項目では、男子19.5%に対し女子34.3%と明確な差異があり、しかも女子のほうに強く思われている点の特徴的である。

最後に、時間選好にかかわる質問項目「将来のためには、今やりたいことをがまんできる(以下、将来優先)」「将来のことはともかく、今が楽しければよい(以下、現在優先)」への回答結果を確認しておこう(図2-2-21)。全体としては、「将来優先」49.8%、「現在優先」48.9%と差異は認められない。しかし、性別でみると、男子で「将来優先」47.0%、「現在優先」51.3%だが、女子では逆転して、「将来優先」52.3%、「現在優先」46.6%となっており、性別による明瞭な差異を確認できる。また、学校の偏差値帯別では、偏差値帯別の学校群と回答傾向に直線的な関係はないものの、偏差値55以上の学校群と45未満の学校群を比較すると、時間選好における志向の違いが明確である(偏差値55以上「将来優先」56.2%>「現在優先」42.4%、45未満「現在優先」54.6%>「将来優先」43.9%)。

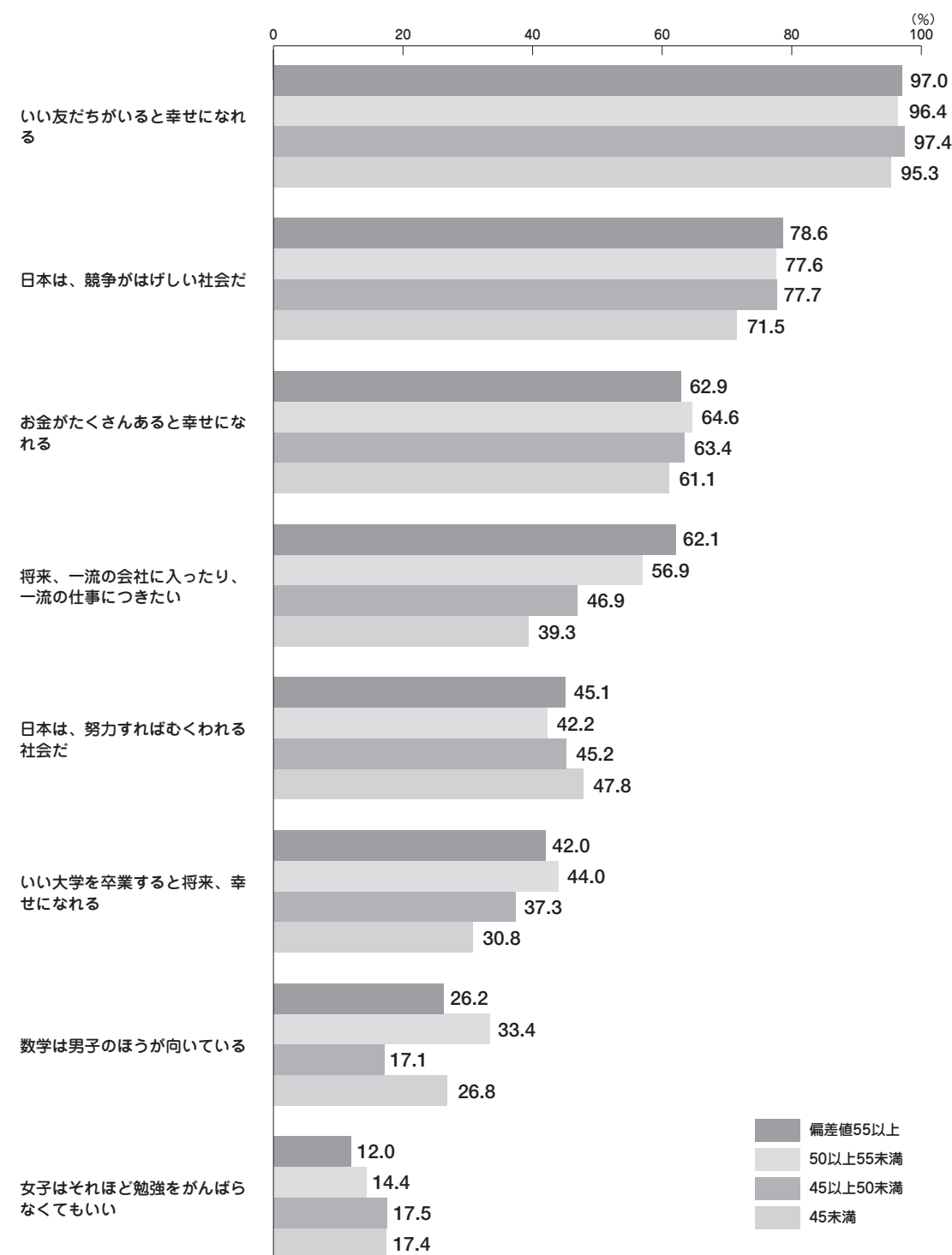
※1『第4回学習基本調査・国内調査報告書・小学生版』参照。
 ※2『第4回学習基本調査・国内調査報告書・中学生版』参照。

図2-2-19 社会観・価値観(全体・性別)



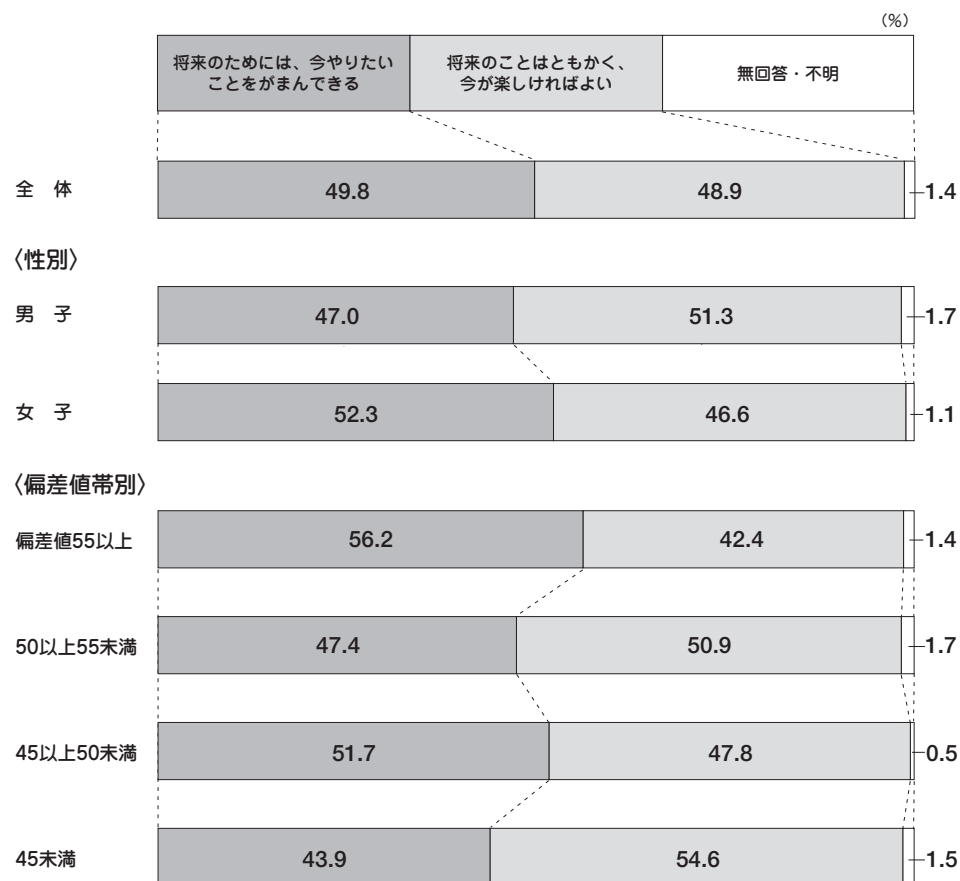
注1) 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。
 注2) サンプル数は全体4,464名、男子2,168名、女子2,269名。

図2-2-20 社会観・価値観(偏差値帯別)



注1) 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。
 注2) サンプル数は偏差値55以上1,593名、50以上55未満905名、45以上50未満416名、45未満1,550名。

図2-2-21 時間選好(全体・性別・偏差値帯別)



注) サンプル数は全体4,464名、男子2,168名、女子2,269名。偏差値55以上1,593名、50以上55未満905名、45以上50未満416名、45未満1,550名。

6. 部活動の参加状況

もっとも多いのは「運動部に入って積極的に参加している」の51.1%である。そして、「入っていない」の20.2%、「文化部に入って積極的に参加している」の18.1%が続いている。

Q | あなたはいま、部活動に入っていますか。

部活動に入っている高校生は、活動に多くの時間とエネルギーを費やしている。ここでは、高校生に部活動の参加状況をたずねた結果をみてみよう。

表2-2-6をみると、もっとも多いのは「運動部に入って積極的に参加している」の51.1%である。そして、「入っていない」の20.2%、「文化部に入って積極的に参加している」の18.1%が続いている。「入っていない」と「無回答・不明」を除いた、8割程度の高校生が部活動に加入していることがわかる。

性別にみると、「運動部に入って積極的に

参加している」では男子のほうが20.4ポイント多く(男子61.5%>女子41.1%)、「文化部に入って積極的に参加している」では女子のほうが18.5ポイント多い(女子27.1%>男子8.6%)。

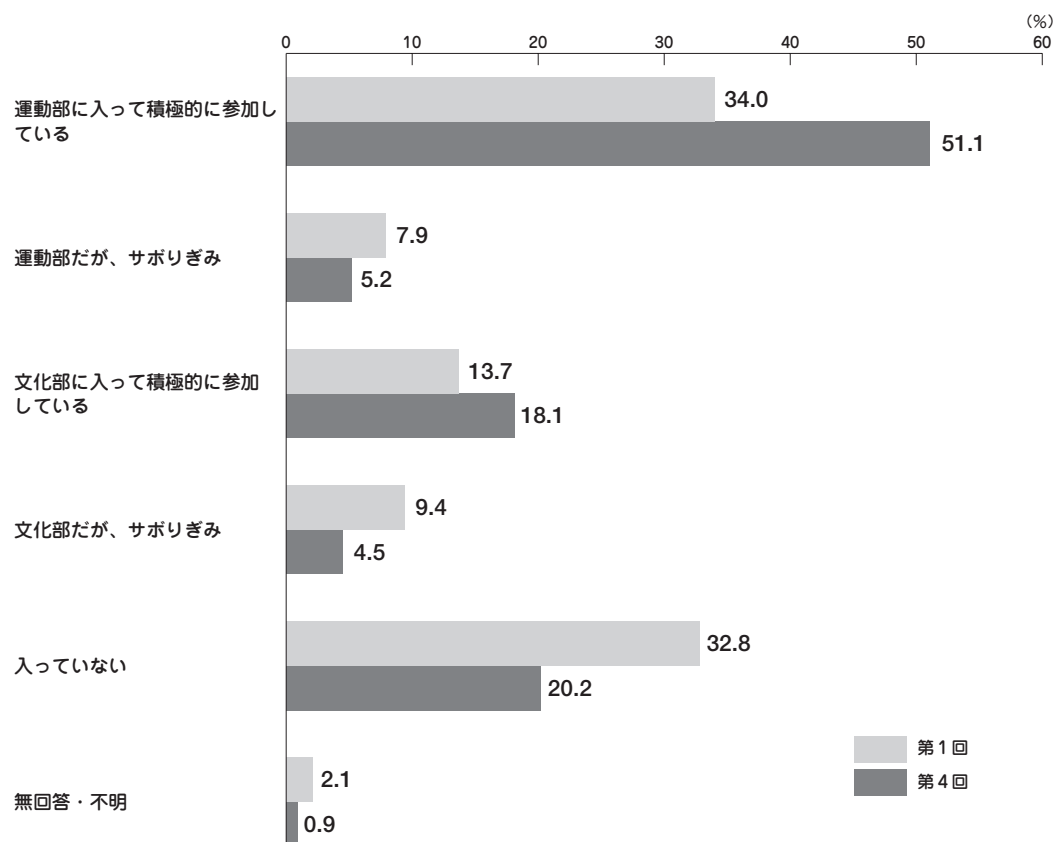
第1回と比較してみると(図2-2-22)、「運動部に入って積極的に参加している」が34.0%から51.1%へ、「文化部に入って積極的に参加している」が13.7%から18.1%へと、それぞれ増加傾向にある。また、未加入率は12.6ポイント減少(「入っていない」第1回32.8%→第4回20.2%)している。

表2-2-6 部活動の参加状況(全体・性別)

	全体 (4,464)	男子 (2,168)	女子 (2,269)
運動部に入って積極的に参加している	51.1	61.5 >>	41.1
運動部だが、サボりぎみ	5.2	6.5	3.8
文化部に入って積極的に参加している	18.1	8.6 <<	27.1
文化部だが、サボりぎみ	4.5	2.4	6.5
入っていない	20.2	19.8	20.7
無回答・不明	0.9	1.1	0.7

注1) <>は10ポイント以上差があるもの。
注2) ()内はサンプル数。

図2-2-22 部活動の参加状況(時系列)



注1) 第2回・第3回は該当項目なし。
注2) サンプル数は第1回2,005名、第4回4,464名。

7. 心や身体の疲れ

もっとも多い「あくびができる」89.9%から、「だるい」85.8%、「目が疲れやすい」77.9%、「朝、なかなか起きられない」76.5%、「あきっぽい」75.3%と続き、もっとも低い「いらいらする」でも68.9%と、多くの高校生が疲れている。

Q あなたはふだん、自分のからだについて、次のように感じることはありませんか。

高校生になると、中学生までより生活範囲が広がるうえに、部活動やアルバイト、予備校など、放課後の過ごし方もさまざまになってくる。そんな多彩な生活できっと疲れがたまっているだろうが、高校生自身は、ふだん自分のからだのことをどう感じているのだろうか。今回の調査では、第1回以来16年ぶりに、疲労感に焦点をあてて、からだのことをどう感じているかをたずねた。

はじめに図2-2-23から全体の傾向をみてみよう。「とてもそう」および「少しそう」と回答する比率の合計の多い順に、「あくびができる」89.9%、「だるい」85.8%、「目が疲れやすい」77.9%、「朝、なかなか起きられない」76.5%、「あきっぽい」75.3%、「いらいらする」68.9%となっている。大半の高校生が「あくびができる」と感じており、もっとも少ない「いらいらする」でも3分の2の高校生がそう感じている。また、図表には示していないが、性別や学校の偏差値帯別による目立った差はみられなかった。

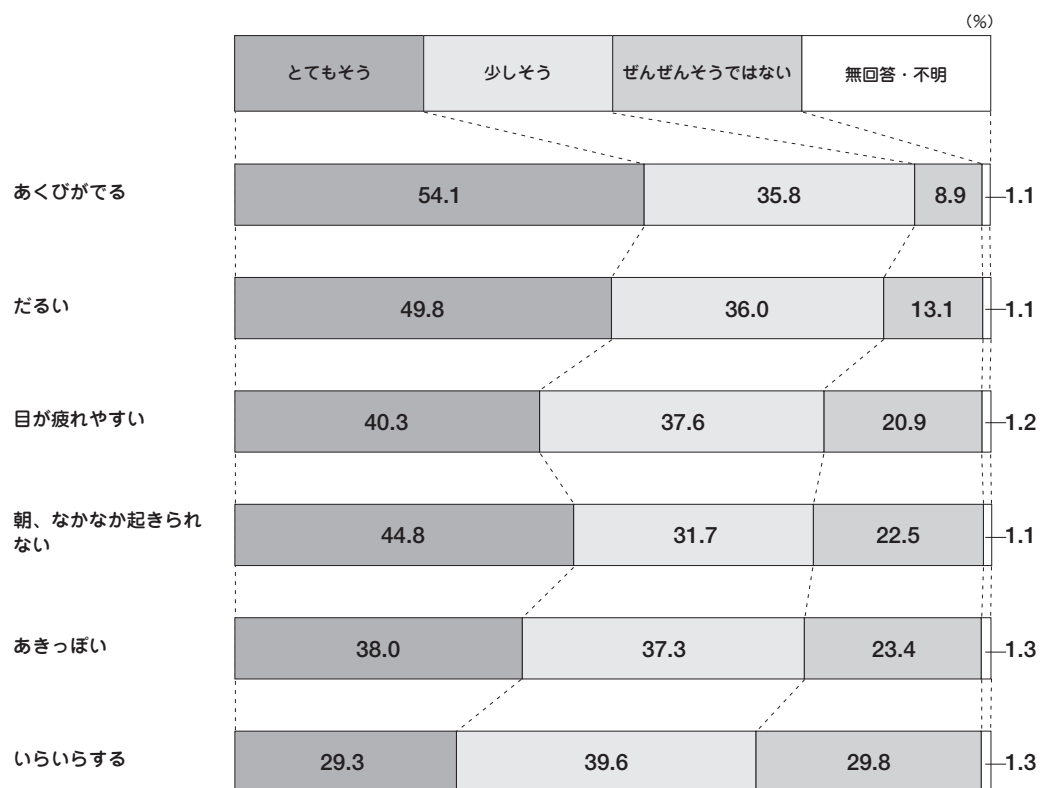
以上のデータからは、ほとんどの高校生が一樣に疲れ、ストレスを感じているといえそうだが、部活動経験別にみると、はっきりとした差がみられるようになる。図2-2-24では「だるい」を例にあげているが、「とてもそう」と回答した高校生の比率に注目してみると、低いほうから、「運動部に入って積極的に参加している」47.8%、「文化部に入って積極的に参加している」48.4%、「入っていない」53.7%、「運動部だが、サボりぎみ」55.7%、「文化部だが、サボりぎみ」59.1

%と、疲労感が増えていっている。このような傾向は、「あくびができる」以外のすべての項目でもみられた(図表省略)。つまり、運動部でも文化部でも、部活動に積極的に参加することで、体を動かしたり勉強以外の頭の使い方をしたりして疲労感を減らすことができるし、逆にサボりぎみの参加のしかたをするくらいなら、部活動に入らず放課後を他の使い道にあてたほうが疲労感は少ないと考えられる。

最後に、16年も間が空いているため、時系列的な変化といえるかどうかは怪しいが、図2-2-25から第1回と比較してみよう。「あきっぽい」以外の項目はすべて増加しているが、注目したいのは、「とてもそう」の比率が大きく増加している点だ。とくに「あくびができる」は36.0%から54.1%へ、「だるい」は39.9%から49.8%へと10ポイント程度増加している。

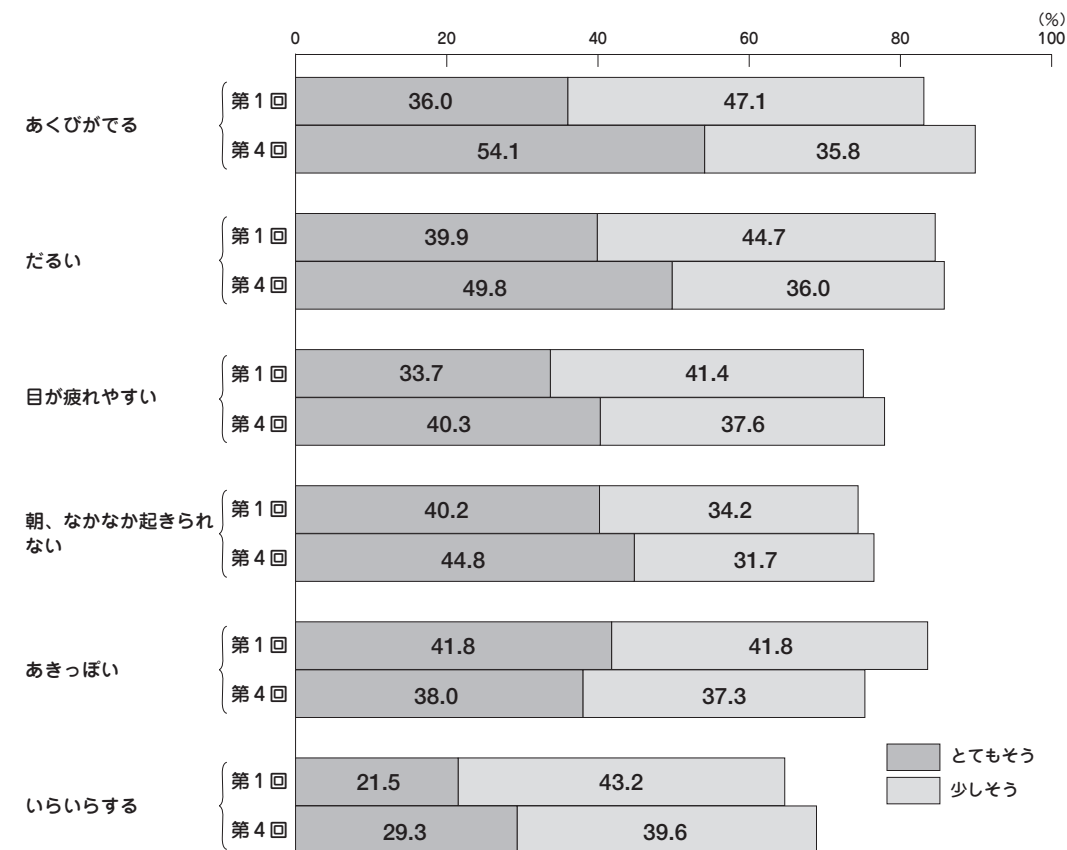
学校の制度としては、完全学校週5日制が導入されたり科目選択の幅が増えたりと、ゆとりある、高校生本位の学校生活が送れるようになったはずだが、実際には、学校での過ごし方を自分で選ばなくてはならなくなった。また、家庭生活でも、ファミレスやコンビニといった外食産業の充実やネット社会の普及などで便利になった一方で、外食をすることが増えたり深夜まで起きていたことがあったりと、食生活や生活リズムが多様化してきた。このような高校生を取り巻く生活環境の変化の影響からか、主観的に“疲れた”高校生は増えている。

図2-2-23 心や身体の疲れ(全体)



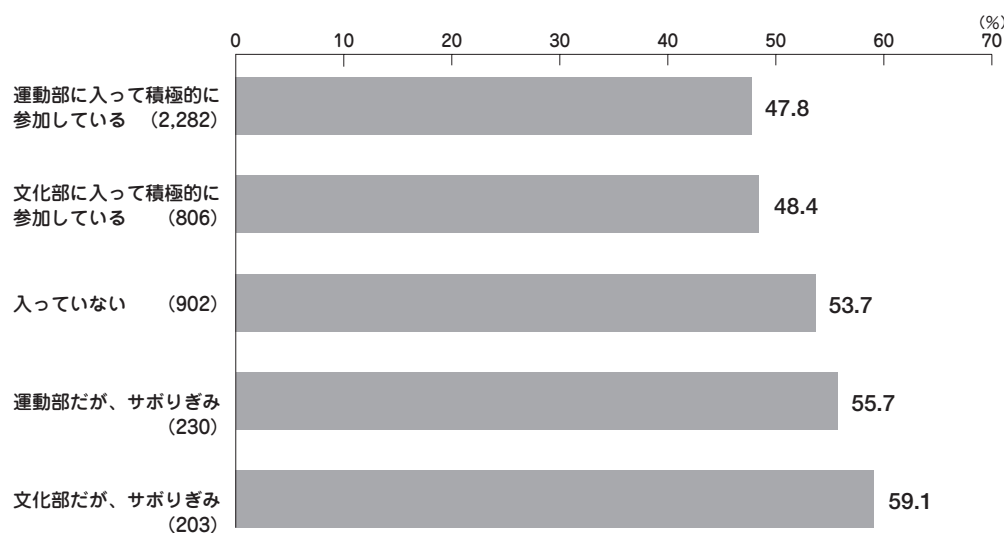
注) サンプル数は4,464名。

図2-2-25 心や身体の疲れ(時系列)



注1) 第2回・第3回は該当項目なし。
注2) サンプル数は第1回2,005名、第4回4,464名。

図2-2-24 心や身体の疲れ(「だるい」・部活動経験別)



注1) 数値は「とてもそう」の比率。
注2) ()内はサンプル数。